凡　　例

1　釈文はすべて横書き１行に書きあらため，原文字の改行は／をもって示した。重ね書きも改行と同じあつかいとした。ただし，内外両面に墨書のあるものは２行にわけて記した。

2　翻字にあたっては，原則として現行の常用漢字をもってした。ただし，一部本字を用いたものもある。

3　釈文は調査次数の順に，遺構ごとにまとめて掲載した。同一遺構の発掘次数が数年にわたるものも次数ごとにわけて掲載した。

4　まず調査次数をかかげ，遺構ごとにまとめて釈文をかかげた。釈文の次行には土器の種類，器種，記載位置および備考を注記した。

5　残画があるものの，釈読不能のものは□で示し，残画から文字が推定できるものは〔　〕を用いて□の上に記した。

6　異筆がある場合は「　」，異筆が数種ある場合は「　」(1)，「　」(2)として記した。

7　多数の文字が習書，楽書されている場合には，文字の種類のみかかげ，同一文字については注記のみとし省略した場合がある。

8　十もしくは×のいずれか判断できないものについては，釈文の表記は，×で統一した。

9　土器の機種については『平城宮発掘調査報告Ⅺ』(『奈良国立文化財研究所学報』第40冊）を参照されたい。第２章の遺構概説中，平城宮瓦編年とあるのは，『奈良国立文化財研究所基準資料』Ⅰ～Ⅸ（瓦編１～９），平城宮土器編年とあるのは，『平城宮発掘調査報告Ⅶ』(『奈良国立文化財研究所学報』第26冊）にもとづく。

10　すでに報告ずみの調査次数の末尾に記した『学報』番号は，次の平城宮発掘調査報告書にあたる。

『学報15』　『平城宮発掘調査報告Ⅱ』

『学報26』　『平城宮発掘調査報告Ⅶ』